

語用論の観点から見た間接的断り発話について

——日本語とアラビア語を対照に——

リナ・アリ (Lina Ali) (カイロ大学)

要 旨

2016年に筆者が配慮表現と異文化間語用論の観点から日本語とアラビア語の断りについて対照研究を行った。その結果、アラビア語の断りが低コンテキスト文化の特徴を持つ一方、日本語の断りが高コンテキスト文化の特徴を持つことが分かった。具体的に、アラビア語がより直接的で断りの理由を具体的に述べるのに対し、日本語が間接的で断りの理由を具体的にでないことが分かった。しかし、本稿ではアラビア語の間接的断り発話において日本語の「~ちょっと..」のような発話に相当する配慮表現があるかないかについて検討した。その結果、アラビア語にも相手と良好な人間関係を築く目的で使用される「in sha allah」という配慮表現も存在することが明らかになった。

キーワード: 語用論、配慮表現、間接的断り、高コンテキスト文化、低コンテキスト文化

1. 研究背景と目的

筆者が博士課程では、日本語とアラビア語の断り発話の違いを、配慮表現と異文化間語用論におけるコミュニケーション様式の観点から分析した。具体的に、Hall(1976)の文化とコンテキストの概念と、八島・久保(2012)と、八代・町・小池・吉田(2009)がまとめたコミュニケーション様式を引用し、日本語とアラビア語の断り発話に見られるコミュニケーション様式を記述した。

その結果、アラビア語では、相手の利益を奪う断りの言語行動によって生じるFTAを軽減するのに、「理由」を強調し、相手から同調や理解を求めるが、日本語では、理由は具体的でなくても、相手から了解を得られるだろうと期待して、その代わりに「謝罪」が重要である。

また、マクロ的側面から考えると、アラビア語母語話者が用いる断り発話は、「言語依存型」である低コンテキスト文化の特徴があると考えられる。一方、日本語では高コンテキスト文化「文脈依存型」の特徴の方が好まれる傾向がある。

以下の表1で両コンテキストの特徴や、これらの特徴から予想できる言語現象の特徴をまとめる。

表1 高コンテキスト・低コンテキスト文化・言語の特徴

高コンテキスト文化・言語コミュニケーションの特徴
聞き手の能力を期待するために下記のような傾向が見られる。
直接的表現より、間接的表現や緩和表現を好む (モダリティの使用)
曖昧な表現が多用される (言い差し文など)
言語化に対して積極的ではない
人間関係が強く重視される
文脈依存度が高い
情報が本来会話当事者に共有されている
聞き手の推測力、結論を判断できる能力が求められる
聞き手の負担度が高い

低コンテキスト文化・言語コミュニケーションの特徴
話し手の能力を期待するために下記のような傾向が見られる。
発話意図の伝達が話し手の責任にある
直接的で分かりやすい表現が多用される
言語に対し、高い価値と積極的な姿勢を示す（具体的な理由説明）
明示的な表現を好む（直接的な断り）
具体的な情報を伝える
言語依存度が高い
話し手の説得力、説明力、論理的説明力が求められる
話し手の負担度が高い

また、本研究では高コンテキストと低コンテキスト言語の違いを、以下の図1⁽¹⁾から図4で示す。

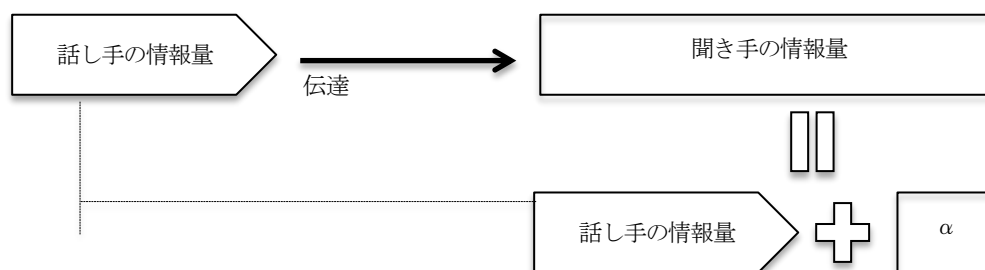


図1 高コンテキスト言語における会話当事者の情報量

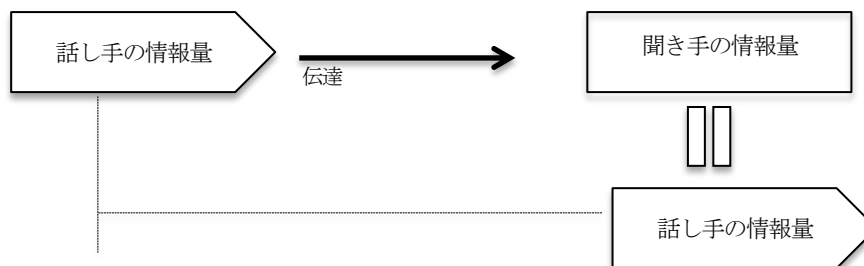


図2 低コンテキスト言語における会話当事者の情報量

上記の図1と図2は、高コンテキスト言語と低コンテキスト言語における会話当事者の情報量を示すものである。「高コンテキスト文化・言語」の場合、話し手（送り手）の情報量が少ない、あるいは完成していない状態でも、伝達のプロセスにおいて、聞き手（受け手）に届く情報量が多いまたは、完成した状態であることを意味している。つまり、話し手の発話に欠けている情報に当たる「結論」や「発話意図」などは、聞き手の推論や推測により完成されるという意味である。一方、「低コンテキスト文化・言語」の場合は、逆に話し手が情報の所有者であり、その情報を自分で伝達しない限り、聞き手に届かないと考えるため、情報伝達の責任が話し手にある。つまり、話し手が所有している情報量がそのまま聞き手に届くため、完成した状態で情報を送るという意味である。換言すれば、話し手の情報の中で発話意図や発話内容の結論などが明確に提示される。それを断り発話を例にとって見ると、以下のように

なる。誘いの断り場面では、次のような例が考えられる。

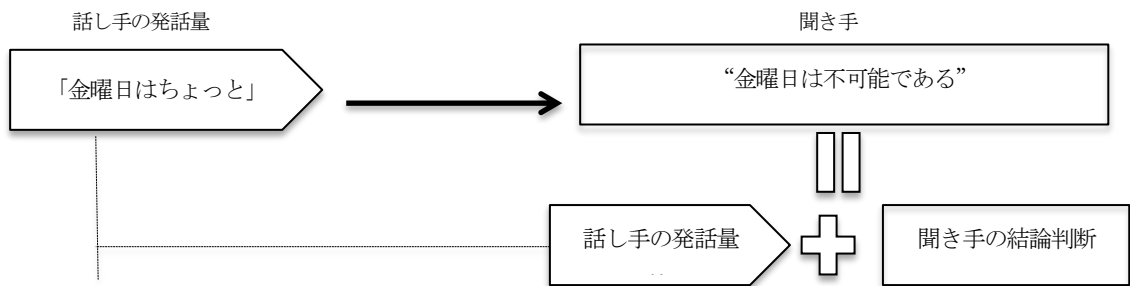


図3 高コンテキスト言語における断り

上記の図では、聞き手または、情報の受け手が、「金曜日は不可能である」、「できない」、「忙しい」などの断り発話の結論を自分で察するということを表している。一方、低コンテキスト言語では、このような断り方の場合、聞き手が以下のように戸惑うことが予想できるのではないだろうか。

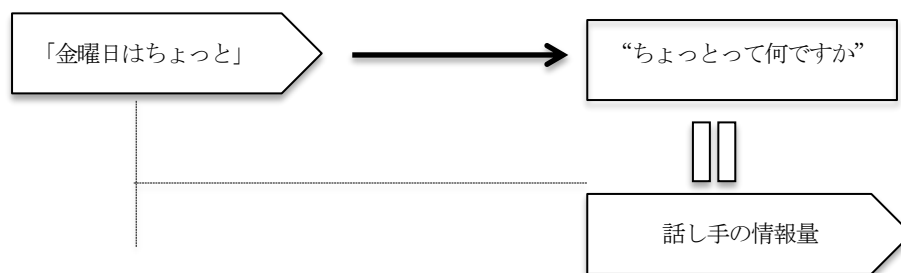


図4 低コンテキスト言語における断り

図4は、話し手の発話量が、そのまま聞き手に届くため、「金曜日はちょっと」という話し手の断りに対して、聞き手が結論の判断に戸惑い、言葉が持つ本来の意味で解釈し、結論を求めることが予想される。

(1) (兄からの要求に対する「断り」)

お菓子と飲物適当に買って来てくれない。

うん～、家にある菓子食べれば。

(「代案提示」) (権 2007:351)

(2) (ケーキをどうぞと勧める友人に対して断る場面)

la 「直接的断り」

(No)

bsaraha ana ändy homoda. 「理由」

(Frankly,I suffer from some acidity.)

msh ha`dar akol cake. 「直接的断り」

(and will not be able to eat cake.)

maälsh 「謝罪」

(Sorry)

(Nelson・ElBakary・Al Batal 2002:50)

(3) (場面内容は、上司から小さな町にある会社の支店に転職すると、給料がアップされるという勧めに対して、部下が断るものである。)

ma`darsh aroh 「直接的断り」
(I cannot go)
aãod hnak lewaħdy 「理由」
(and stay there by myself)
heya bãyda gdan äan ahly 「理由」
(It`s very far from my family)
(aman,lazem akhud baly men mamty) 「理由」
(Besides, I also have to take care of my mother)
w ma`darsh asafer elmasafa dy kolaha 「理由」
(and I cannot travel all this distance)
waãod lewaħdy fi elwagh elebly 「理由」
(and live alone in Upper Egypt)
(「直接的断り」+「理由」+「理由」+「理由」+「理由」+「理由」)

(Nelson・ElBakary・Al Batal 2002:50)

上司と部下である力関係の中でも、以上のように断り発話が結論で始まって、その結論のFTAを軽減するために、結論を裏付ける理由が論理的に説明され、「理由」が一回のみでなく、異なる理由を重ね、自分の断りを正当化しようとしている。

以上から、アラビア語の断りは「直接的」であるのに対し、日本語の断りは間接的である場合が多く見られる。しかし、量的に少なくとも、エジプト人がはっきり断りたくないとき、どのような表現を用いるのか、日本語の「~ちょっと」に当たる配慮表現があるのかを研究する意義があると筆者が考えられる。それで、現在エジプト人が用いる間接的な断り発話と配慮表現について研究を進めている。

本稿では、日本語の断りにおける「~ちょっと」のような配慮表現に当たるアラビア語の配慮表現に着目して、明らかにすることを目的とする。

2. 調査データ①

研究の出発点として、まず Facebook に載っていた以下の記事を紹介する。

記事のタイトルは、「7 ways Egyptians Say “No” without saying “No”」である。タイトルから分かるように、アラビア語母語とするエジプト人も直接的に“No”とは断らずに、拒否を表すことができる。それらの表現または、方法は以下のとおりである。

- 1- In sha allah (アッラーが望めば) 「断り発話」
- 2- Shokran (ありがとうございます) 「飲物や食べ物の勧めに対する断り」
- 3- Tayeb mashi (はい、分かりました) 「指示、命令に対して用いる」
- 4- Bokra bokra (明日、明日)
- 5- Ha7awel , ashooof (~ようにする、見てみる) 「断り発話」
- 6- 7ader (分かりました) 「指示、命令に対して用いる」
- 7- Momken (~かも知れない) 「依頼、誘いに対して用いる」

上記の表現を見ると、それらの共通点として、全てが否定的ではなく、「受け入れ」の意味を持つが、

実際は断りの意味を含意していると思われる。

記事によると、それらの表現の中で最も断りの場面で用いられるのは、「In sha allah」（アッラーが望めば）が挙げられている。その次、「Shokran」（ありがとうございます）になっている。

3. 調査データ②

エジプトに住んでおり、働いている日本語母語話者4名を対象に、それらの表現のどれが最も分かりにくく、戸惑いやすいのかをインタビューを行った。インタビューの結果は、「In sha allah」と「Shokran」（ありがとうございます）が最も分かりにくく、「はい」なのか「いいえ」なのか区別しにくいという回答をもらった。本稿では特にこれらの2つの表現に着目する。

4. 「In sha allah」について

断り発話の中で「In sha allah」（アッラーが望めば）が使われることが多い。では、なぜ特に断り発話の中で、もしくは（No）と断りたいときに、「In sha allah」が使われるのかについて以下で説明する。

「In sha allah」（アッラーが望めば）が本来持つ意味は、イスラム教の人が将来やるつもりまたは、やろうと思っていることについて話すときには使われるものである。それは、イスラム教は、「人の力だけでは、ものごとが成り立たなく、もっと偉大な存在である「アッラー」の力で物事が成り立つと信じるため、将来について述べる際に、必ず「In sha allah」（アッラーが望めば）という表現を付ける。つまり、自分なりにやりたい、やろうとは思っているが、将来何が起こるかは人には分からないので、最終判断はアッラーの力に任せるという意味が含意されている表現である。例えば、以下本来の用法を表す例を挙げる。

本来の意味

(4) A: Bokra hatruh elgamaa ?

(明日学校へ行きますか。)

B: Ah In sha allah

In sha allah (作例)

(はい、In sha allah.) (100%本来の意味を表している)

(5) A: Ana lmma aruh elyaban hakul sushi kol yom.

(私は日本に行ったら、毎日寿司を食べに行く。)

B: Ooly in sha allah.

(in sha allah と言いなさい。)

しかし、上記のように本来の意味を表す「in shaa allah」以外、拡張した断りの機能を表す「in shaa allah」の例も見られる。

(6) 断りの意味で使われる例（依頼と勧めに対して）

A: Bokra hanruh kolna nakol ,msh hatygy maana?

(明日、みんなで食事しに行く予定だけど、一緒に行かない。)

B: In sha allah (50%は本来の意味、50%は断りの意味) (DCT 調査から)

また、アラビア語を自然に習得したエジプト人の子どもたちが、常に親が用いる「In sha allah」に対して、非常に否定的な印象を持ち、必ずしもイコール「No」だと捉えることが日常的によく見られる。例えば、以下の2つの場面が挙げられる。それらの例文は筆者が実際に直面した場面である。

(7) (車で遊びに行く途中でのお母さんと子どもの会話)

A: Ehna rayheen netfasah sah !

(これから遊びに行くんだよね。)

B: In sha allah

A: Msh in sha allah, ehna hanruh.

(In sha allah じゃないんだよ。行くんだよ。)

B: Ana maoltsh Laa. Baool In sha allah

(いやとは言っていないでしょう。In sha allah だって。)

A: Battaly b2a.

(子どもが泣きながら) (やめてー。)

(8) A: Ayza albes fostan

(洋服を着たいの。)

B: Ehna khalas blail . elbsy el bejama.

(もう夜でしょう。パジャマ着なさい。)

A: Laa ayza albes fostan.

(いや、洋服着たいの。)

B: In sha allah, In sha allah.

A: Laa baa.

(泣きながら) (いやだー。)

例 (8) では、「In sha allah」の繰り返しの現象も見られたのだが、それは5ページで提示した「Bokra bokra」(明日、明日)と同じ現象である。それらの表現が繰り返し用いられることにより、話し手が今怒っていることが予想される。その際に用いられる「In sha allah」は、完全に断りを表しているものである。つまり、発話者(断り手)が直接的に断るのを避け、アッラーの力に責任を委ねていると言える。そうすることにより、自分が断り手であるにも関わらず、責任を回避している。

以上、見てきたとおり、「In sha allah」が本来の意味や用法を表す場合と拡張した断りの機能を持つ場合もあることが分かる。しかし、これらの区別基準がこれまでに行われた先行研究では明確になっていないのが現実である。そして、本来の意味を表していないときに、必ずしも常に断りを表すのか、そうでないのかという問題点が残されている。

エジプト人同士である場合、ある程度区別することができるが、外国人がエジプト人とコミュニケーションを行うとき、「In sha allah」は「受け入れ」なのか「断り」なのか非常に戸惑い、判断が難しいという意見をよく耳にする。このことから、「In sha allah」は、日本人が用いる「~ちょっと」に当たるものなのではないかと考えられる。

言い換えると、依頼や誘いに対して In sha allah を用いる人が、責任を回避して、依頼者の依頼を断った際、それが自分の力ではなく、アッラーが望んだことであるから、許してもらおうと考えていると言える。このように、どの言語でも言葉が含意している意味によって、相手との人間関係を良好に保とうとすることがあると考えられる。

5. 「Shokran」について

(9) A: Etfaddal takol cake?

(どうぞ、ケーキ食べますか。)

B: Shokran. = (結構です。大丈夫です)

(ありがとうございます)

(10) 家族同士の場合

A: takol cake?

(ケーキ食べる。)

B: Laa msh ayza.

(いいえ、いらない。)

エジプトでアラビア語を勉強している日本人の方から次のような話をよく聞く。エジプト人に何か食べ物に勧められて、それで感謝して誘いを受け入れようと思ったら、すぐ誘いをやめるのはなぜなのか不思議だと言う。

このように、飲物と食べ物の勧めに対して使われる際の感謝表現には恩恵を表す本来の機能に加え、断りの機能も備えていることが分かる。

6. 結論

本稿では、アラビア語にも日本語の「~ちょっと」、「~大丈夫です」、「けっこうです」に相当する曖昧な断り表現が存在することが分かった。また、未来について話すときに使う「in sha allah」と、感謝を表す「Shokran」には、本来の用法以外、拡張した対人的機能も備えていることが明らかになった。しかし、今後より具体的に多くの場面におけるそれらの表現の機能について再検討する必要がある。

7. 今後の課題

「in sha alah」の使用実態を探るため、8名のエジプト人アラビア語母語話者を対象に断りに関する予備調査として、ロールプレイ調査を行った。今後の課題調査データを分析し、断り手はどのような意図で「in sha allah」を用いたかについて意識調査も行う予定である。最後に、「in sha alah」が本来持つ機能と、拡張した「断り」の機能のある程度区別できる基準を語用論の観点から明確にすることは本研究の最終目的としている。

注

(1) 図内の「 」は発話を、“ ”は心内発話を示す。

参考文献

石井敬子・北山忍 (2004) 「コミュニケーション様式と情報処理様式の対応関係—文化的視点による実証研究のレビュー—」『社会心理学研究』19:241-254.

井出祥子 (2006) 『わきまへの語用論』大修館書店

岡本佐智子・斎藤シゲミ (2004) 「日本語副詞「ちょっと」における多義性と機能」『北海道文教大学論集』5:65-74.

権英秀 (2007) 「「ものの買出し」に対する日本人の「断り」表現—大学生と高校生を対象に—」『現代社会文化研究』40:343-357.

—— (2008) 「「断り」表現の分析方法—フェイス複合現象の紹介—」『現代社会文化研究』43:225-242.

- 佐藤慎司・熊谷由理（編）（2013）『異文化コミュニケーション能力を問う—超文化コミュニケーション能力をめざして—』ココ出版
- 施信余（2006）「日本語における「依頼・断り」のコミュニケーションについて—日本人女子大学生同士の電話会話を分析対象に—」『早稲田大学日本語教育研究』8:51-62.
- 白川博之（2009）『「言いさし文」の研究』くろしお出版
- 西田ひろ子（2000）『異文化間コミュニケーション—人間の行動原理に基づいた—』創元社
- 西田司・グディカンスト、W. B.（2002）『異文化間コミュニケーション入門』丸善
- 野田尚史・高山善行・小林隆（2014）『日本語の配慮表現の多様性—歴史的変化と地理的・社会的変異—』くろしお出版
- 野村美穂子（1992）「断りの表現—コミュニケーションと合意—」『言語学論叢』10-11:15-28.
- 三宅和子（1994）「日本人の言語行動パターン—ウチ・ソト・ヨソ意識—」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』9:29-39.
- 八島智子・久保田真弓（2012）『異文化コミュニケーション論—グローバル・マインドとローカル・アフェクト—』松柏社
- 八代京子・町恵理子・小池浩子・吉田友子（2009）『異文化トレーニングポータレス社会を生きる』三修社
- 山岡政紀・牧原功・小野正樹（2010）『コミュニケーションと配慮表現—日本語語用論入門—』明治書院
- リナ アリ（2015a）「断り発話における程度副詞について—配慮表現としての機能を中心に—」日本語用論学会 第17回『大会発表論文集』（Proceedings）10:1-8.
- （2015b）「エジプト方言アラビア語の断り発話に見られる配慮表現について—日本語と対照して—」『カイロ大学日本語日本文学科紀要』96-112.
- （2016）「日本語とアラビア語の断り発話を正当化するメカニズムについて—異文化間語用論と配慮表現の観点から—」筑波大学人文社会科学国際日本研究専攻博士論文
- Hall, E. T. (1976) *Beyond culture*. New York: Doubleday.
- Lakoff, R. (1972) Language in context. *Language* 48:907-927.
- Nelson, G., M. Al Batal and W. El Bakary (2002) Directness vs. Indirectness: Egyptian Arabic and US English Communication Style. *International Journal of Intercultural Relations* 26:39-57.
- Nelson, G., J. Carson, M. Al Batal and W. El Bakary (2002) Cross-culture pragmatics: Strategy use in Egyptian Arabic and American English Refusals. *Applied Linguistics* 23 (2):163-189.

参考リンク

<www.Facebook.com>, 2016年10月15日参照

(リナ・アリ、Lina Ali、カイロ大学日本語日本文学部専任講師、linaali59@hotmail.com)